

障害に対する理解が 急激に広まり、今は適切な 教育が望まれています。

小塩先生は知的障害や自閉症などの発達障害に関わって37年。研究テーマとして障害者の就労支援に26年間取り組み、大きな成果を上げてきました。「当初に比べて、障害に対する世間の理解は急激に広まり、現在は適切な教育が望まれるようになってきた」と言います。従来、通常の教育と特殊教育は分離されてきましたが、軽度発達障害の児童は6.3%にも上るため、今年度から学校教育法が改正。全ての学校で特別支援教育ができるよう、教師の養成が急務となっています。これまで教えてきた現職の先生とは勝手が違うため、「今は学生に障害者や特別支援教育について、いかに理解してもらうかが研究中」とのことでした。



文学部教育学科教授 小塩允護【おしお ちかもり】

- 【学歴・職歴】
- 1971年3月 早稲田大学第一文学部心理学専攻卒業
 - 1971年4月 愛知県民生部社会課
 - 1972年4月 愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所能力開発部技師(のちに主任)
 - 1979年4月 愛知県立春日井高等看護学校非常勤講師
 - 1984年4月 国立特殊教育総合研究所精神薄弱教育研究部中度精神薄弱教育研究室研究員(のちに研究室長)
 - 1985年4月 横浜国立大学教育学部(現人間教育科学部) 特殊教育特別専攻科・臨時教員養成課程兼任講師
 - 1999年4月 愛媛大学教育学部大学院教育学研究科兼任講師
 - 2001年4月 独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部長
 - 2004年4月 独立行政法人国立特殊教育総合研究所教育支援研究部総合研究官(のちに上席統括研究員)
 - 2007年4月 愛知淑徳大学文学部教授



- 【小塩先生の
主要著作・論文リスト】
- 発行はすべて独立行政法人国立
特殊教育総合研究所
- 監修 ○研究代表者
 - 「大学における 支援体制の構築のために 発達障害のある学生支援ガイドブック—確かな学びと充実した生活をめざして」2005
 - 「自閉症教育実践ケースブック—より確かな指導の追究」2005
 - 「知的障害養護学校の先生のための 自閉症教育実践ガイドブック—今の充実と明日への展望」2006
 - 「発達障害のある学生支援ケースブック—支援の実際とポイント」2007
 - 「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」2006
 - 「知的障害のある人の生涯学習における支援プログラムの開発に関する研究」2007

私 は、知的障害や自閉症、学習障害など発達障害のある人たちの教育的支援について研究してきましたが、その研究のベースとしていたのが、応用行動分析学という学問領域です。応用行動分析学とは、人の行動と環境との関係を扱う学問であり、「何が人をどのように行動させているか?」という命題に答えようとする科学です。

応 用行動分析の基本的な枠組みは、弁別刺激—反応—強化刺激から成る3項隣接性と呼ばれるものです。このことを説明するのに、信号のある交差点を渡る行動がよく例に出されます。私たちは前にある信号が青なら横断歩道を渡り、赤なら横断歩道の手前で止まります。信号の位置と色が弁別刺激、渡ったり止まったりすることが反応、安全に目的地に着くことが強化刺激です。弁別刺激はその時にどういった反応をとればよいかを知らせてくれますが、それは環境との相互作用による学習の産物です。最初は、他の人が渡っているのを見て(これも弁別刺激です)渡るとか、お母さんに「渡っていいよ」と言われて(これも弁別刺激です)渡るのでしたが、学習がこの段階で留まっていれば、他の人やお母さんがいない

ま た、強化刺激とは、それぞれの人がとって良いこと、行動の目的が叶うことです。チョコレートを口に入れたら「おいしかった」とか、先生の話を集めて聞いていたら「面白かった」とか、横断歩道を手を挙げて渡つたら「お巡りさんがニコッと笑ってくれてうれしかった」などです。おとなになっても手を挙げて横断歩道を渡っていると、周りから笑われて、そのうち手を挙げなくなり(消去といえます)。でも、この笑いの区別がつかないと、この行動が続いてしまいます。

人 の在りようは極めて多様ですが、同時に、人としての、生物としての行動の原理、学習の原理は共通します。こんなことも含め、「違いを知って同じを覚える」を座右の銘にしていますが、本学に来て、「違いを共に生きる」の方がアピール性があると感じています。教育学科の授業を通じて、こうしたことを理解でき、体現できる教師を育てていきたいと考えています。